

7/17 ヨハネの福音書 3 章 16 節『死といのち』

長谷川 望 牧師

* 神様から平等に与えられた「いのち」

ある病院の創設者が書いた「いのちだけは平等だ」という言葉と考えに山中伸也教授は共鳴して医師を志したと言われます。その平等の元は、神様が人を平等に造られたからです。一人一人を良いものとして、神に似せて造られたので平等なのです。ですから私たちは自分のいのちをおろそかにしてはなりません。同時に他人のいのちも神様から与えられた尊いものなので、決して人を傷つけたりいのちを奪ったりしてはならないのです。

しかし、私の母のように 106 歳まで生かされたいのちもあるし、母の子どもが戦時中 5 歳と 3 歳で病気で亡くなったことを思うといのちは本当に平等なのかと疑うこともあります。しかし、いのちを与えるのも神ならば、いのちを取られるのも神なのです。いつどのようにか私たちにはわかりません。神はいのちの価値に上下を付けられる方ではありません。その意味で平等なのです。ですから誰でも与えられたいのちを感謝して生きなければなりません。

* いのちより大切なもの（星野富弘さんの詩より）

「いのちが一番大切だと思っていたころ 生きるのが苦しかった

いのちより大切なものがあると知った日 生きているのが嬉しかった」

「いのちより大切なもの」とは何か。「その答えは、こうですよ、ということ」は簡単だけど、きっとそれは意味のないことです。自分で苦しみながら見つけた時に、あなたにとって意味があるのです。」と星野さんは答えておられる。

* 平等ではないいのち=いのちより大切なもの=永遠のいのち

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」

（ヨハネ 3：16）平等ではないいのちは特別な人だけに与えられるいのちであり、それは「御子を信じる者」であると言います。「いのち」の第一段階は地上に生まれて死ぬまで。第二段階は死んでからイエスが再臨して世の終わりが来るまで。第三段階は新天新地ができて限りない永遠の時まで。「永遠のいのち」とは、神がいつまでもともにいてくださるということです。地上のいのちは永遠のいのちの始まり、一部であると言えます。

* 「御子を信じる者」は滅びることはない。「滅び」は永遠のいのちと反対のことばで、光が無い闇の状態。神との交わりが全くなってしまうと言う状態です。イエスは神の御子であり、私の救い主であることを信じる者は永遠に至るまで神がともにいてくださり、いのちを与えてくださるのです。